

〈目 次〉

○巻頭言	2
○特集 学生フラザの現状と課題	4
○飛翔探検隊	10
○研究室紹介	17
○OB・OG紹介	27
○REVIEW×REVIEW	35
○飛翔な日々	37
○人事異動のお知らせ	40
○編集後記	42

表紙作成

広島大学総合科学部総合科学科2年

岩永 明華さん

巻頭言

「野火」の山蛭について



梶原 修
(総合科学研究科長)

数年前のことであるが、総合科学部のある先生から、私が大岡昇平の「野火」について書いた文章（正確には私が要約した「野火」の一場面の記述）の誤りを指摘されたことがある。「野火」は第二次世界大戦末期のフィリピン・レイテ島を舞台に、日本兵が飢餓の果てに人肉食の問題に直面すると

いった内容の小説だが、指摘を受けた箇所を原文によって引用すれば、次のような場面である。

「雨が来ると、山蛭が水に乗って来て、蠅と場所を争った。虫はみるみる肥って、屍体の閉じた眼の上辺から、睫毛のように、垂れ下った。」

私は私の獲物を、その環形動物が貪り尽すのを、無為に見守ってはいなかった。もぎ離し、ふくらんだ体腔を押し潰して、中に充ちた血をすすった。私は自分で手を下すのを怖れながら、他の生物の体を経由すれば、人間の血を摂るのに、罪も感じない自分を変に思った。≫（引用は『大岡昇平全集3』筑摩書房、一九九四による。）

主人公は、「この際蛭は純然たる道具にすぎない。他の道具、つまり剣を用いて、この肉を裂き、血をすすると、原則として何の区別もないわけである」と考え、深刻な葛藤を経験する。という重要な場面なのだが、この記述のどこがおかしいかお分かりだろう

か。その先生によると、蛭が動物の死体から血を吸うことはないとのことであった。数ある「野火」論の中に、そのような指摘を見かけたことはなかったから、私は、一瞬虚を衝かれたような思いがしたのであった。

そのような次第で蛭について調べてみる必要を感じた私は、手近なところでインターネットの検索から始めてみた。そうすると、たくさんのホームページがヒットし、それらによって、蛭の唾液腺からはヒルジンが分泌され、それには麻酔作用のある物質や血液の凝固を妨げる物質、血管を広げて吸血しやすくする物質などが含まれているという興味深い事実を知ることができたのだが、肝腎の問題に答えてくれるものは見あたらなかった。しかし、いつでも質問を受け付けるといって親切なホームページがあったため、質問をしてみたところ、すぐにお返事をいただいた。それによると、蛭は、ポンプのように能動的に血を吸い出す機

能を持っていないため、流れてくる血を受動的に吸うしかなく、吸血するには相手の動物に血流があることが必要だということであった。きちんとした調査をするならさらに裏付けを取る必要があるだろうが、このような回答を得て、当面の私の疑問は解消したのであった。

ところで、このような「誤り」は、何を意味するだろうか。大岡昇平は、自分の経験を正確に記憶していないということだろうか？ そうではなく、大岡はこの場面を経験によって書いているのではなく、フィクションとして書いている、それ故このような錯誤も生じたと考えるべきだと私は思う。

大岡の戦争体験をかなり忠実にふまえた「俘虜記」と比較してみると明らかだが、「野火」は純然たる虚構の、まさにフィクションⅡ小説として書かれている。舞台は大岡が実際に戦ったミンドロ島からレイテ島に移されているし、「俘虜記」の主人公がアメリカ兵を

撃とうとして撃たなかったのに対し、「野火」の主人公はフィリピン人の女性に発砲し殺してしまっている。それに、そもそも「野火」は、戦場で発狂して帰国した元兵士の手記という設定で書かれた小説なのである。そのように「野火」は、大岡が実際に体験したこととは別の、あり得たかもしれない自分の可能性を追求する、思考実験の意味合いを持った小説だと私は思う。

だから、小説の物語内容にだけ注目して、悲惨な戦場の有様を描いて戦争を告発した作品だというような理解をしただけでは、この小説の読みは完了しないと思う。また、このような「誤り」を有しているから（あるいは事実を描いていないから）といって、この小説の価値が減ずるといふようなものではないとも考える。とはいえ、一方で私は、このような指摘を生前の大岡昇平に対して行ったらどうだったろうなどという、他愛もない空想をも思い浮かべる。小説のリアリティは細部の確か

さによって支えられるものであるから、彼は何らかの修正を施したろうかなどと考えてみるのである。そんな空想はともかくとして、ここに述べたような指摘を得られることは、我が学部・研究科のありがたさであるということを一応のまとめとしておいてこの稿を終えることとする。

